

夏季岡山県高校野球 振り返って

全国高校野球選手権岡山大会の代替となる夏季岡山県大会（10日閉幕）は、倉敷商が参加校の頂点に立った。甲子園につながる例年の夏、新型コロナウイルスによる影響を乗り越え、集約を白紙にした球児の熱戦を振り返る。

5試合で平均5・6得点、0・8失点、昨秋の中国大会を制した倉敷商は善戦方を示していた。試合後半を住み込んだ2年生左腕投手は21回まで1失点、右の福家は走者を背負ってからよく粘った。計1失点、10打点の守備も隙がなかった。

チーム打率2割9分5厘の打線は、この一掃で2番藤田が出塁し、4、5番の福高と田村が快打を飛ばした。出場を決めていた春のセンバツが中心になった悔しさもあつた大会、勝利への執着心と精神面の強さが垣間見えた。

準優勝の朝日学園は、4強トップのチーム打率3割4分3厘、いずれも右腕の打率を残した角戸、浦谷、中野らの好打者がそろっていた。絶好のエースが不在の中、裏投で臨み、特に左腕原は学芸館、山陽戦で力投した。

ベスト4の旭大付は右投手の4強、2回を投げた右腕藤田がエース格の働きをし、攻撃では2番森元がチームトップの打率5

# 倉敷商 攻守に隙なく



夏の岡山県大会に輝き、表彰を受ける倉敷商ナイン。10日、倉敷マスカット

割9分8厘、同じく4強の山陽は打線がつかぬを欠いたが、久岡、藤野、高橋の中軸が計4本塁打と昇内陸一のパワーを發揮した。

上位校が複数投手で戦い進んだ大会で各投手は左腕山田が全4試合先投、光南は大会、井上

## 熱戦の跡



## 波乱少なく上位は順当 実戦不足の影響も

昨秋の長打力が目を引き、岡山県はセウスポー伊藤の巧みな投球が光り、倉敷商は左腕藤野の滑り、相手を打ち抜く力があった。昨夏の甲子園に出場した学芸館は有線な下級生がけん引し、2回戦で強敵の倉敷工を倒した。

3回戦までこの姿をみせたベスト4校のうち、昨秋4強の倉敷商、旭大付、山陽、朝日、山陽は、昨秋の中国大会に出場した倉敷、朝日、山陽が順当に4強入り、波乱は少なく、延長戦は1試合のみで試合中投球がこたえなかった。関西は森安、鹿田らが軸の打線がうまく機能した。朝日、山陽は11年ぶりに3回戦に届いた。今夏限りで休養する長生が軸立ち、若手投手はこの10年で最も多手の変化は今年も変わらなかった。

3年生の集大成の場として用意された昨秋以来の公式戦。感度対面での練習試合や練習試合と異なり、試合は今年も変わらなかった。

（岡崎朝史）

【注】エースはリード校

# 野球で きき本 当に幸せ

無観客のマスクトスタジアム（倉敷市）に穏やかな声が響いた。

「今、最高の仲間とともに野球ができること、本当に幸せです」。18日開幕した夏季岡山県高校野球大会の開始式で倉敷商の原田将多主将が選手宣誓を務めた。甲子園という夢を未知のウイルスによって奪われた3年生を代表しての大役。幾多の試練を乗り越えてきた自らの歩みを重ね、区切りの舞台上に立てる喜びをストリートに表現した。入学以来、激動の日々を過ごしてきた。

1年生で名門の背番号を勝ち取った2年前の夏、自宅がある倉敷市真備町地区を西日本豪雨が襲った。思い出のクラブもユニホームも、倉敷商OBの父が夏の甲子園に出場した時に持ち帰った土も流された。昨夏の全国選手権岡山大会決勝は土増場の同点機で打てず最後の打者

## 選手宣誓の原田主将

（倉敷商）

1面関連

夏季岡山県高校野球



## 西日本豪雨で被災 出場決めた「春」中止 試練越え万感

誓文は「ここに立てることがうれいぞ」といって一言から始まった。練習も試合もできず、このまま引退する「とぞえ覚悟したという自粛期間。「こんなにも野球ができることがありがたい」と思ったことはありません」。ありのままの気持ちを言葉にした。

被災後、学校近くにアパート

選手宣誓をする倉敷商の原田将多主将。幾多の試練を乗り越え、集大成の大会に臨む。倉敷マスクト（今中雄樹撮影）

を借りて野球がしやすい環境を整えてくれた家族、そしてチームメイトら多くの人に支えられて迎えた高校最後の夏。思い出

に。その悔しさをぶつけた秋は、だった夏の全国選手権もなくな中国大会を初制覇したが、8年ぶり、心に迷いが生じた時期もあふりの出場を決めていた今春のセンバツは新型コロナウイルスの影響で中止となった。

「甲子園がないのに、やる意味あるのかな」。かすかな希望

一言で初心に帰った。そんな仲間と一緒に考えた宣

づくりの大会にするつもりはない。「どんな形でも勝ちたい。笑って終わりたいけど、いろいろありすぎて涙が出るかな」。初戦は23日。万感の思いを胸に岡山王者への一步を踏み出す。

（岡崎創史）

# 球音再び

～夏季岡山県高校野球大会

## 1 倉敷商

### 一番強いと証明する

止が決まった。春以降、選手の気持ちをつなぎ留めていた夢舞台は、未知のウイルスによって地方大会もろとも奪われた。

「甲子園だけを目指してやってきた。(中止決定直後は)心の整理ができなかった」と原田将多主将(3年)は明かす。昨夏の全国選手権岡山大会決勝は八回に勝ち越しを許し、わずか1点差で涙をのんだ。あの日の悔しさを請らす機会はおれなかった。

#### チーム引き締め

みんなで野球ができる喜びを感じながらも久々の実戦にエンジンはかからなかった。従来の岡山大会に代わる夏季県大会に向け、チームは6月27日、今年初の練習試合を行った。本格的に練習を再開してから1カ月弱、昨秋の中国大会に出場した藤井(広島)を相手に1試合目は2-8で完敗だった。

先発マウンドは休校期間中の鍛錬によって最速が140km/hを超えた右腕の福家悠太(3年)。だが生命線のコントロールが定まらず、5回7失点と崩れた。打線も相手守備の乱れに乗じた得点のみ。核となる2番原田、3番浅野大器(3年)はそれぞれ無安打に

## 激動の1年 集大成へ



封じられた。福家からの継投がパターンだった左腕の永野司、中軸候補の山下周太の両2年生が出場しなかったとはいえ、主力メインの1試合目で負けるのは新チーム結成後初めてのことだ。走塁ミスがあった4番福島大輝(3年)は「気持ちのスイッチが入っていなかった」と猛省した。らしさを欠いた戦いは、3年生の集大成となる舞台へ、チームを引き締めるきっかけになった。

#### 戻ってきた活気

ノックで仲間を盛り上げる倉敷商ナイン。集大成の舞台を前に、活気が戻ってきた＝倉敷商高野球部グラウンド

岡山東商(11度)に次ぐ10度。創部90年目の伝統校は「夏の倉敷」と呼ばれる。そのプライドは脈々と受け継がれている。

大きな声で絶え間なく飛び交い、選手の表情は明るい。新たな目標に定めた夏季県大会を前に、グラウンドにも例年と同じ活気が戻ってきた。

モチベーションを高める朗報も届いた。日本高野連はセンバツに出場予定だった32校を甲子園に招待し、8月10日から各校が1試合ずつ行う「交流試合」を開催する。

「絶対優勝して、倉敷が一番強いと証明してから交流試合に臨みたい」とチームメートの思いを代弁するのは1年秋から主力を張る福島。自分たちが立てなかった春の聖地を目指す後輩たちのために「勝つことで良い流れを持ってくる」と福家は話す。

どのチームよりも心が激しく揺れ動いた1年。2020年世代の最終章は、8年ぶりとなる夏の岡山王者の称号をつかみ、思いを遂げる。(岡崎創史)

第102回全国高校野球選手権岡山大会の代替となる夏季県高校野球大会が18日に開幕する。コロナ禍に翻弄(ほんろう)された球児にとって昨秋以来の公式戦になる。参加58校の中から注目校を取り上げる。

新型コロナウイルス感染症がまん延し、緊急事態宣言は全国に拡大されていた。「夏は絶対に俺たちが勝つ。勝つための一日、一瞬を過ごさなさい」。休校前最後の練習となった4月17日、倉敷商の堀山和洋監督(39)はミーティングで説いた。今後への不安を胸の奥にし、選手たちは翌日から自主トレーニングに励んだ。野手はスイングの強さと速さを求めて素振りを重ね、投手陣は山道を走り込んで下半身を強化。それぞれが勝負の夏に備えた。

しかし、1カ月後、悪夢は繰り返される。昨秋の中国大会を制し、出場切符を手に入っていたセンバツに続き、全国選手権の戦後初となる中

# 夏季岡山県高校野球 振り返って

新型コロナウイルスの影響で中止となった第102回全国高校野球選手権岡山大会の代替として開催された夏季岡山県大会（10日閉幕）は、さまざまな感染対策を講じ、球児による熱戦が繰り広げられた。主催した県高野連の多田一也会長（玉野校長）に異例の夏を振り返ってもらった。（岡崎創史）

## 県高野連

## 多田一也会長

計10日間の大会の総括を。「関係者から感染者が出ず、無事に開催できたのが一番。子どものために何とかしてやろうというみんなの思いが形になった。前例にとらわれず、オール岡山で柔軟に取り組めたことが成功につながった」

全国選手権と地方大会の中止決定から一夜明けた5月21

# 「オール岡山で成功」

日、県独自の大会を開く方針をいち早く打ち出した。

「当初は『3年生大会』のイメージだったが、チームによって事情は違う。県高野連の役員だけでなく、生徒や現場の声をもっと聞くべきではという意見が内部であり、（県内の監督でつくる）監督会にも出席した。大会の位置付け、ベンチ入り人数、9イニング制、優勝校を決めるトーナメント方式など、そこで意見を反映し、本来に近い形の大会を実現できた。監督会には大会期間中も運営面で協

力してもらった」

「各校の考査の日程を全て調べた。（就職やAO入試に関わる）評定平均値が出る期末試験がある7月末までは平日を使わないよう試合を組んだ。県教委や県高体連など外部との調整も例年以上に行った」

「入場は控え部員や保護者に限られ、甲子園につながらない大会でも選手たちのひたむきなプレーが印象的だった。ユニホームを着て、クラブとボールを持った時から甲子園

は憧れだったはず。喪失感もすくなく大きかったと思う。それでも、できない言い訳をするのではなく、与えられた環境の中でベストを尽くそうというのがこの大会の意義。目標を失っても切り替えて頑張る姿は、大人が見習わなければならぬ。一般の人に見せてあげたい。ようなゲームがたくさんあった」

「来春のセンバツにつながる秋の県大会（9月26日開幕予定）の見通しは、

「新チームの練習時間が例年より取れていない。本来、8月下旬から始まる地区予選を9月中旬にずらし、従来のリーグ戦ではなく、トーナメントで県大会出場校を決める。1試合で終わるチームもあるが、やむを得ない。現時点では県大会は予定通りの開催を目指しており、今まで以上に感染予防に神経をとがらせてやっていく」



夏季岡山県大会を振り返る  
県高野連の多田一也会長